2022.10.28開催

第32回例会報告

インターンシッププログラム実施報告・参加報告

多摩地区にある19の私立大学、多摩地区大学就職研究会の協力により実施されたインターンシッププログラム。8月中旬～9月中旬の1カ月間、6社の企業において20名の学生がインターンシップを行いました。例会では、3社の企業と6名の学生に、それぞれの立場から実施後の報告をしていただきました。

森田テック株式会社　総務部 辻野桜子 氏

弊社はインターンシップの実施は初でした。従業員の平均年齢が53歳と高齢化が進み、若い世代への技術継承が課題になっており、今回良い機会をいただいて感謝しています。

受け入れた4名のインターン生の応募理由は「社会人とは、企業とは何か知りたい」というものでした。就活学生が重視するのは「会社の雰囲気」「福利厚生」「給与」でしょう。そこで、ホームページに載っている情報だけでは分からない社内の実情を詳しく知ってもらおうとプログラムを構成しました。

実際には、弊社の経営理念や業務など基本情報を伝え、次に、直近5年間の昇給・賞与、残業実績値、有給休暇の取得状況などのデータを表にして紹介しました。福利厚生については、実際にこの制度がどう使われているか、育児休業や介護休業を取得した今年度の事例を挙げながら詳しく説明しました。いずれも、学生からはなかなか聞きづらいが、気になる部分だと思います。

3日間に分け、営業、電気設計、製造など各部署の担当12名から、業務内容のプレゼンも行いました。それぞれの仕事への責任感やお客さまへの想いを感じることができ、社員にとっても改めて自社に誇りをもてるいい時間でした。インターン生からは後日お礼のメールをもらい、大きな収穫を感じたインターンシップとなりました。

エム・ケー株式会社　常務取締役 小林久恵 氏

日野市に本社を構え、まちづくりを行なっている会社です。「小さな大企業」「人間力の塊、ヒューマン企業」「オンリーワン企業」「農耕型経営理念」「100年企業を目指す」。これは弊社を象徴する5つのキーワードですが、インターン生には初日にこのキーワードを伝え、「最終日に、弊社に最も合うキーワードを、理由とともに発表する」という課題を出しました。

プログラムは、まず座学を行い、その後、実際に私たちが手がけた開発現場の視察をしました。2日は「有効活用」をテーマに、ヘッドリース（長期一括借上げ）案件を見て回りました。最終日には、学習成果として社内発表をしてもらいました。

弊社がインターンシップを行うに当たって気をつけているのは、インターン生にリアルを体験してもらうことです。また、最終日の発表は必ず全社員に聞いてもらいます。学生が弊社で学んだことを改めて聞くことで、社内の理解を深めることができます。感動を共有できる場で、発表する側にとっても聞く側にとっても大きな刺激になりました。

《参加学生の声》

エム・ケーが手がける社会貢献について発表することで、事業内容を深く理解できた2日間でした。自分の地元である多摩地域の良い企業を知るきっかけになりました。インターンシップに参加したことで、就職活動に対する姿勢が前向きになりました。「入社がゴールではない」と気づかされ、自分が目指す将来について考え直す良い機会にもなりました。

株式会社シーズプレイス　取締役副社長 清野智美 氏

弊社は6年目になりますが、創業当時から「企業理解」や「男女共同参画啓発」を目的にインターン生を受け入れています。今回は10日間、4名の学生に参加してもらいました。

プログラムの前半では、最初に社長からオリエンテーション、その後、起業サポート施設や保育園、男女共同参画センター、児童発達支援スクールなど、6事業所に出向いて実務を行いました。

後半は、学生同士で協力して、課題の制作と発表をしてもらうようにしています。今回は「アンコンシャス・バイアス」について考えてもらいました。

インターンでは、必ずスタッフや社員と同じ仕事を体験してもらいます。また、インプットだけでなくアウトプットも必ずしてもらいます。今回の課題発表は非常に優秀で、内容に社員も感動して涙を流して喜びました。素早くアンケートを作り、たった1日で200名の声を集めた若い学生さんたちの行動力には、特に感銘を受けました。良い機会をありがとうございました。

《参加学生の声》

今回のインターンシップで初めて「アンコンシャス・バイアス」を知りました。無意識の思い込みに気づかされ、他人も自分も大切にしながら生きたいと考えさせられました。

児童福祉施設の実務では、地域や教育との連携が分かりました。また、アクションを起こすためのさまざまな手段や、笑顔が地域に届けられる喜びを学ぶことができました。大変有意義な時間でした。

総括 多摩地区大学就職研究会　東京経済大学キャリアセンター長 齋藤隆大 氏

現在のインターンシップは、オンラインだったり半日だったり、学生が満足する企画が少ない印象の中、現場の社員と触れ合える充実のプログラムを実施していただき、参加学生も有益な体験ができたと感じています。インターンシップで、企業イメージだけでなく、就職への考え方も大きく変えていただきました。

今後とも、多摩地区の大学と企業が、学生を含めて連携しながら、接点を持てるような企画を継続していただけると嬉しく思います。

第32回例会報告

高校生向け「1分動画プロジェクト」・高校職員による企業見学会実施報告

高校向けプロジェクトについて

認定特定非営利活動法人育て上げネット　執行役員 井村良英 氏

高校生は職場の「雰囲気」を知った上で就職先を選びたいという希望を持っています。しかし、学校の進路室にたくさん送られてくる求人票や資料の中から、高校生が自分の力だけで自分にあった企業と出会うということは困難な状況です。

そこで「高校生に地元の良い会社のことを就活前に知ってもらいたい」と始めたのが「1分動画プロジェクト」です。企業の「雰囲気」が分かる1分動画を作り、進路室で流していたところ、今年度は数人の高校生が「この会社に就職したい!」と企業調べを始めました。1分動画を見て、会社のInstagramなどのSNSをチェックし、ホームページやパンフレットを見た上で職場見学に行って決めたそうです。高校生の情報取得のために、1分動画は非常に効果的だと確信しました。

また、高校の先生と地域の良い企業をつなげよう、と行なったのが「高校職員による企業見学会」です。実際に企業を見て、「真面目で一生懸命なあの子にはこの会社があいそうだ」「学校指定企業ではないが自信をもって生徒に企業を紹介することができた」という声も先生方からいただきました。

砂川高校、羽村高校、秋留台高校の3校だけでも100名程度の高校生が多摩地域の企業に就職します。今後もこの企画を続けていきたいと思っています。

ニシハラ理工株式会社　取締役経営企画部長 西原昌宏 氏

弊社は毎年、高校生が新入社員として入ってきますが、その裏には採用担当の「大量の求人票の束の中から選んでもらうためには、どう差別化すればいい?」という悩みがあります。コロナ禍から採用活動にも変化があり、今回いただいた「PR動画」という提案は突破口になると考えました。

動画は、新入社員と弊社担当の2人で試行錯誤しながら制作してもらいました。1分間の工場見学のような構成で作りました。浅く広い内容になってしまった、中小企業の雰囲気の良さや強みが盛り込めなかった、出演者に親しみやすさが足りなかったなど、内容に反省点は多々ありますが、実際に動画を見た高校生から、めっきと化学の授業の関連性に気づく声が聞けたりと、多少なりとも弊社を身近に感じてもらえたと思います。

今後は、新入社員や若手社員の意見を聞きながら、「入社前に知りたかったこと」や「気になる会社のポイント」など、テーマを絞って構成したら良いと感じました。高校生だけでなく、見る人にとって親しみやすい内容や媒体を使うことで、大学生・一般向けにもやっていける試みだと思うので、うまく活用して続けていければと思います。

◉ニシハラ理工株式会社 1分動画「どんな高校生と働きたいですか?」
（育て上げネット チャンネルより）
https://youtu.be/fGGWBJ32L1Q

若手社員がインタビュー形式で、社内の様子を明るく紹介している

株式会社オギノパン　代表取締役 荻野隆介 氏　本社工場直売店 副店長 田中晴奈 氏

弊社は、多摩エリアに隣接する相模原市でパンの小売販売業を営んでいますが、求人を出したときのリアクションにはいつも非常に苦労しています。今回のプロジェクト参加の経緯は、高校求人を頑張っていきたい、と考えていたためで、高卒の求人に特化した動画に着手しました。

動画を載せる媒体も、高卒求人向けのサイトだけではなく、YouTube、Instagram、TikTokにも公開しようと考えました。若い世代の社員に任せて、動画制作・発信してもらいました。制作側の想いとしては、「オギノパンの良さについて知ってもらいたい」という気持ちと同時に、「高卒就職を応援したい!」という気持ちもあったようです。多くのSNSを活用することで、就職活動以外の一般のお客さまに向けても宣伝効果も生まれる、といろいろな楽しいショートムービーを考えてくれました。

実際に、YouTubeの動画を見て、沖縄県に住む高校生から応募が来ました。今までにない経路からの応募に喜んでいます。これを機に、高校生以外にもたくさんの方に動画を見てもらって、客数の増加にもつなげられればと思っています。

◉オギノパン チャンネル（YouTube）
https://www.youtube.com/channel/UCw-mYmMa6sGqRumDPFbUKmQ

社内の雰囲気がよく分かる、高校生にも親しみやすい楽しいムービーが並ぶ

2022.10.28開催

第32回例会報告

ー 基調講演 ー

深く考えず、やりたい事はさっさと始めよう、人生は短い

第32回例会 第3部の講演では、株式会社ミチコーポレーション代表取締役・冒険起業家の植田紘栄志氏に『深く考えず、やりたい事はさっさと始めよう、人生は短い』をテーマにお話しいただきました。

講演内容

広島県の芸北という地で「ぞうさんカフェ」を経営しています。芸北は過疎地で、人もいない、駅もインターチェンジもありません。そんな田舎で分かったのは「発信しないと誰も来ない」ということ。そこで、自分でメディアを作って発信すべく「ぞうさん出版」を立ち上げました。自分が執筆した本がベストセラーになって映画化されれば、ご当地巡りの人が来るんじゃないかという、実に単純な発想からです。

執筆した『冒険起業家　ゾウのウンチが世界を変える。』という本は、私のスリランカでの事業をめぐる自伝です。「200ページ以上の本は売れない」と言われる中、私が書いた本は小さな字で400ページ。もともと出版業界の人間ではなかったので常識を知らず、初出版でたくさんミスもしましたが、業界的には驚かれました。書店も面白がって派手に展開してくれて、業界誌やテレビ番組でも特集が組まれ、ベストセラーランキング3位にまでなりました。

あらすじは、道を聞かれたスリランカ人にお金を貸してあげたら、何年か後にスリランカに招待され、誤解や偶然も重なって、かの地でペットボトル再生事業の会社を立ち上げることになるという、浦島太郎のような話です。

ペットボトル再生事業を立ち上げてからは、まずゴミの分別を進めようと、法整備と収集運搬システムを整えました。文部大臣に掛けあって、子供たちに「エコ教育」、今で言うところの「SDGs」教育も進めました。なけなしの資本金で作った工場がなんとかスタートした頃、野良ゾウが工場の壁を破壊するという事件が起こりました。ゾウは暴れ出すと、人間を踏みつけるものすごく怖い動物です。スタッフも怖がって来なくなり、全く工場が稼働しなくなりました。

困った時にヒントをくれたのは、子供たちでした。ゴミ分別の啓蒙活動の一環で絵画展 を行った時に、ゾウのウンチでできた再生紙を使いました。日本に絵画展を持ち込むと、絵よりも紙が話題になったのです。ここから「ぞうさんペーパー」のアイディアを得て、ビジネスを軌道に乗せることができました。BBCのワールドチャレンジというビジネスモデルのコンテストではグランプリ、ぞうさんペーパーで作った絵本は、UNESCOアジア文化センター賞をいただきました。子供たちへ地球環境について話をしていく中で、自分のビジネスマンとしての「好み」がはっきりしてきました。とにかくこだわりは「自然素材」です。

私の人生を大きく変えたのが、2011年の東日本大震災です。「活断層がなく、食料自給率が高い場所で子育てをしたい」と辿り着いたのが、今住んでいる芸北でした。親切な芸北の人たちが過疎で困っているのを見て、私はビジネスで何か貢献できないかと考えました。また、芸北の過疎は日本列島全体の問題だ、と感じました。何か面白いビジネスができたら、日本の過疎地を活性化できるのではと考えています。

今は、ぞうさんカフェの他にも、農業・狩猟体験ビジネス、保存食ビジネスなど、思いついたら即実行し、さまざまなメディアで発信しています。手作業の手間がかかる部分は福祉施設にお願いし、新たな雇用創出も意識しています。

私が本に込めたメッセージは、「どんなビジネスも世の中が平和でないとできない」ということ。スリランカでの私の運転手の弟は、賃金がいいからと入隊し、戦争で亡くなりました。弟も雇ってあげられれば、とその時大変後悔しました。戦争に行かなくても食べていける雇用を作るのがビジネスマンの目指すところだと思っています。スリランカで、大義があるビジネス、儲かるほど誰かがハッピーになれるビジネスは素晴らしい、と考えるようになりました。これからもこの信念はブレさせることなく、冒険を続けていきます。

講師プロフィール Lecturer Profile

植田 紘栄志 氏 ［株式会社ミチコーポレーション代表取締役・冒険起業家］

1971年岐阜県出身。1997年、株式会社ミチコーポレーションを設立。スリランカにてペットボトルリサイクル事業やゾウの排泄物の再生紙「ぞうさんペーパー」など、多くの事業を手掛ける。2011年より広島県北広島町芸北に移住、カフェや出版事業などさまざまな地域活性化ビジネスを精力的に行う。